

表4 課題提示時期で分割した集団成績 (平均とSD)

課題の提示時期	等質集団				異質集団			
	乱数表集計		創造性検査		乱数表集計		創造性検査	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
前半	52.2	9.78	50.5	13.07	46.0	6.11	44.4	8.38
後半	49.6	13.42	53.3	7.97	52.2	10.48	51.7	10.02

注：各セルのデータ数は n=8

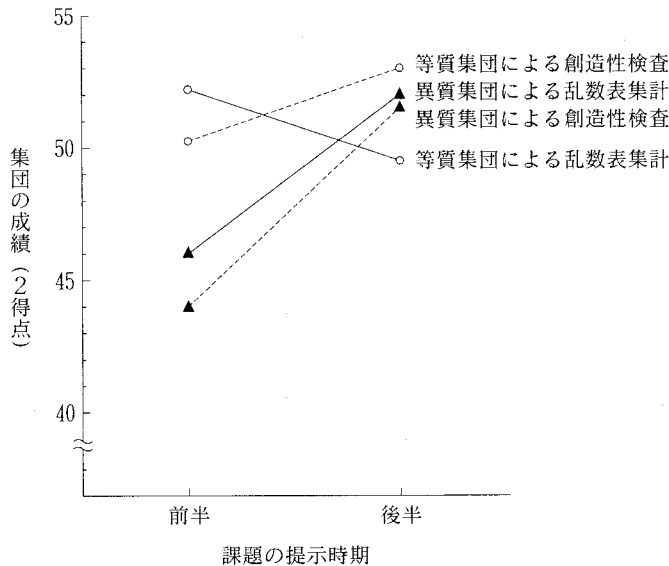


図1 集団の構成と課題のタイプ別にみた集団成績の推移

団はどちらの課題においても前半の相対的に低い成績からスタートし後半等質集団の成績水準まで上昇している。このような等質集団と異質集団の成績推移に見られる差異は、集団が所与の課題に取り組むための体制を作り上げるのに要する時間が異質集団では等質集団より長くかかるであろうことを想像させる。この点を仮説に組み込んでおけば、上記表3にみられた(C)の主効果と(A×C)の交互作用の有意水準は片側検定となって $p < .10$ に近いものとみなすことができよう。今後集団の成績に及ぼす集団構成(等質 vs 異質)の効果をみようとする時には、時間的推移を考慮に入れる必要があることを、これらの結果は示唆している。

なお、われわれの当初の仮説すなわち集団の構

成と課題のタイプとの交互作用は、先行経験からの影響を受けていない「前半」だけの資料に限定して(つまり、提示順序の要因を除いて)2要因の分散分析にかけた結果においても支持されなかった。

2. 課題への動機づけ

次に課題への動機づけに関する結果を検討する。データは前半の作業終了後と後半の作業終了後に実施した質問紙調査において同じ7項目の質問によって測定されたものである。各項目は5段階評定であったから、7項目の合計得点の取り得る可能な範囲は7~35点であるが、これを項目数で割って5点尺度に変換したものを分析に用いた。図2はこの得点を実験条件別にグラフ化したものであり、表5は(A)集団の構成、(B)課題